

イギリスの総選挙

えんどうこうし

三月三十一日、イギリスにおいて総選挙が行なわれ、労働党が第二位の保守党を、得票率においては六パーセント、議席数では一一〇もの大差をつけ圧勝した。それまで一九六四年の総選挙で与野党の議席差がわずかに四で不安定な状態であったイギリスもようやく安定し、大失敗を労働党が犯さないかぎり、向う五ヶ年間にわたる長期政権が約束された。

このような勝利を労働党が収めた理由はいったい何であろうか。その掲げるところの政策が保守党のそれにくらべてより国民の要請に答えていたからであろうか。それとも前の総選挙（一九六四年一〇月）以来一六ヶ月の労働党の施策がよい実績を示したからであろうか。

その掲げる政策というものを労働党、保守党と比較してみると、前者が鉄鋼産業の国有化という政策を掲げている以外、その他の政策においては目標はほぼ共通と見てよい。結局、どちらの党がよりよくその共通目標を達成できるかを競争するに過ぎないと言ってよいだろう。どちらの党を国民が選んでも、差はあまりないのである。

また労働党政府のこれまでの実績がよかったからであろうか。実際はポンド危機に迫られて、その対策に手をやき、選挙綱領にはほとんど手がついてなかったといってもよい。またその危機に対処するため対米依存度を強めて、ベトナム問題等においてかねてからの労働党の主張である平和外交の主

1959 年度 総 選 挙

得票率	保守党 49.4	労働党 43.8	☆ 5.9 ※ 0.9
-----	----------	----------	----------------

議席数	保守党 366	労働党 258	☆ 6
-----	---------	---------	-----

1964 年度 総 選 挙

得票率	保守党 43.4	労働党 44.1	☆ 11.2 ※ 1.3
-----	----------	----------	-----------------

議席数	保守党 304	労働党 317	☆ 9
-----	---------	---------	-----

1966 年度 総 選 挙

得票率	保守党 41.9	労働党 47.9	☆ 8.5 ※ 1.7
-----	----------	----------	----------------

議席数	保守党 253	労働党 363	☆ 12.2 ※ 1.7
-----	---------	---------	-----------------

注 得票率の数字はパーセント

☆ 自由党 ※ その他

導権をとるにはほど遠い状況となっている。

ではどうしてなおかつ労働党は勝利を収めることができたのだろうか。それは前回の総選挙まで一三年間もの間、保守党政権のもとでのマンネリ化、およびプロヒューモ事件等に象徴されるその末期の腐敗ぶり、その他保守政権の施策に対する中間層のあきたりない気持があったこと。また昨秋ヒューム新党首を迎え若返りをはかった保守党がその体質改善をいまだにやりとげていないと見られていたこと。これに對して労働党政府は前回総選挙以来わずか四議席の議席差のため綱渡りをするような議会運営に明けふれて選挙時の公約に手がつかず、またポンド危機に追われ通して長期に渡る政策を行なうどころではなかった、とはいふものの、その一六ヶ月の試練の期間を経てウィルソン首相が「信頼のおける有能な指導者、」であるとのイメージを与えたこと。特にウィルソン首相の持つ個人的な魅力、組閣後示した慎重さとも言える態度、重厚な持ち味が中間層の浮動票を吸収して今回のような結果となったのである。

今回の総選挙のグラフを見ると前にも述べたように保守党、労働党の差は六パーセントしかない。たとえ保守党より労働党への中間層の支持が移ったことが全ての原因とみても（実際はこれは誤りであるが）その全体にしめる割合はわずか三%の移動なのだ。ところが議席数は前にもやはり述べたように一一〇議席もの差となつてきてきている。イギリス下院は有名な単純小選挙区制をとっているが、その持つ欠点の一つとして全国的にはわずかに六パーセントの得票率の差が、議席数ではずっと拡大されて地すべりの変化をおこすのである。イギリス下院の定員六三〇名の六パーセントは約三八人で実際の結果の一一〇人もの差とは大幅に異なる。

つまり労働党勝利の原因は、前記の細かな諸々の事項が中間層の支持の移動ということに集中し、そのわずかの差が小選挙区制の持つ特性により大幅に拡大され一一〇議席の差となったとみることができよう。

今まで主に労働党の大勝の原因を求めてみたが、次にその他の政党についてみてみよう。イギリスで第三党は自由党である。自由党というのは昔、ホイッグ党と呼ばれ、今の保守党と対抗していた政党である。グラフを見るとわかるように今はその地位を労働党に譲つて、第三党といつてもわずかに十二議席の小政党となっている。その自由党だが一九六六年度総選挙時には全国的にみて八、五の得票がある。八、五%の得票率というのは、前と同じように下院六三〇名とする

と約五四名の議員を議會に送りこむ数である。實際は十二議席しか得ておらず、自由党に投票した人はまことに残念だったであろう。一九六四年度総選挙の時は、今回よりさらにひどく一一、二パーセントの得票率、その割合でいくと七一議席をしめるはずが實際は九議席しかしめておらずその不合理が目にとまる。一九五九年度までしかグラフが無いのではつきりと知ることができないが、おそらく自由党は毎回総選挙でこの不運な状態を味わってきたのであろう。小選挙区制の選挙による小政党の悲しさである。まことにあたりまえの話であるが議會というものが国民の代表により国民の意志をそのままあらわすものであるとするならば自由党は小選挙区制のためその責任をはたさせていない。

次に今回の選挙で議席数のうちにその他二名というのがあつた。前回も前々回も議席は三党でしめられているのに今回の総選挙にのみあらわれた珍現象である。筆者もいろいろ調べてみたが、どうもこの二議席はつきりしない。片方は議長の下で、もう一方はアイルランド共和労働党というところがある。議長はともかくとして、アイルランド共和労働党なるものがいったい何者であるかサッパリわからない。それでこの稿はおしまいになるわけだが、小政党に不利な小選挙区制にもかかわらず議席を獲得したアイルランド共和労働党におめでとうと言いたいものである。

P.1 小林派の事前運動／山崎孝成

P.11 インドネシア政変の動向／浅沼健三

P.15 イギリスの総選挙／えんどうこうじ

P.19 日本と韓国における関係／吉田茂

P.23 原爆による被害について／M・O

投 稿

P.27 私の大学生活／佐藤公一

P.32 南北問題と日本の関係／野田好信

P.34 低開発国の経済発展／亀井章

P.47 教育制度と入試問題／藤井常雄



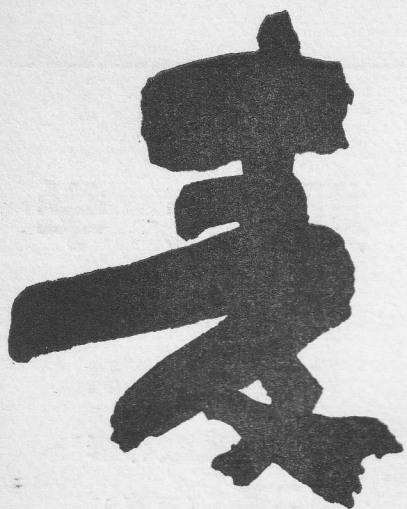
1966

10

岡山県立岡山朝日高等学校

政治経済部

(ユネスコ研究会)



1967



11

朝日高校政治経済部

(ユネスコ研究会)